第１章　都市の概況

“あそびいっぱい野洲市”
小学校５年　岩田　祐佳さん

“やさしさの街　野洲市”
中学校１年　照喜名　恵理さん

※平成 19 年３月策定時“未来の野洲市”作品募集　入選作品より

第１章　都市の概況

１．位置・沿革等

（１）位置・地勢

野洲市は、平成 16（2004）年 10 月に野洲郡の野洲町と中主町とが合併して新たに誕生した都市です。滋賀県の南部、湖南地域に位置し、西は守山市・栗東市、南は湖南市、東は近江八幡市・竜王町にそれぞれ接し、日本最大の湖である琵琶湖に面しています。東西 10.9km、南北 18.3km に広がり、面積は琵琶湖を含み 80.15k ㎡です。

本市は、直線距離で大阪市へ約 65km、京都市へ約 25km、大津市へ約 17km の距離にあり、これらの都市とはＪＲ東海道線（琵琶湖線、京都線）で結ばれています。

本市は、複雑で変化に富んだ気候で、北陸と瀬戸内気候の特色が共存した気候が特徴となっています。比較的温暖で雨量の少ない地域ですが、琵琶湖面と陸地の温度差によって発生する湖陸風が琵琶湖周辺地域の風を特徴づけています。

本市の地形は、東南部の三上山を中心とする山地と、山地から琵琶湖に向かって緩やかに広がる平坦地に大きく分けられます。通称「近江富士」と呼ばれ地域のランドマークとなっている三上山や菩提寺山、妙光寺山、鏡山等によって山地を形成しています。この山地部には、滋賀県希望が丘文化公園、県立近江富士花緑公園、家棟川の水源である辻ダムや山上ダムなどが立地し、自然環境を身近に感じられる地域となっています。平坦地は、野洲川、日野川等の堆積作用によって形成された沖積平野で、野洲川右岸の扇状地と平坦な三角州に大別されます。扇状地には市街地が形成され、三角州の大半は農地（水田）として利用されています。

（2）沿革

野洲市域を含む滋賀県は、古くから近江国と呼ばれ、滋賀郡、栗太郡、甲賀郡、野洲郡、蒲生郡等 12 郡 93 郷があったとされます。このうち野洲郡は、現在の野洲市と守山市、近江八幡市の一部に該当し、郡衙（ぐんが）（役所）は現在の野洲市役所周辺にあったと推定されています。

中世の近江国は、守護である佐々木氏（六角氏）の勢力下にありましたが、市域では現在の祇王小学校周辺に佐々木氏の家臣である永原氏が居城し、勢力をもっていました。豊臣秀吉の天下統一以降、全国で検地が行われ、野洲郡における村の規模、境界が確定し、野洲村、市三宅村、三上村、吉地村、乙窪村、比留田村、西河原村など、現在の集落（大字）につながる村の領域が成立しています。

近世以降は一円領主が存在しなかったこと等から、野洲郡には拠点となる城下は形成されませんでした。なお、元禄 11（1698）年に東氏遠藤家が滋賀郡、野洲郡、栗太郡、甲賀郡のうち一万石の領地を与えられ、三上村に三上藩の陣屋が造られました。

明治４（1871）年、廃藩置県によって湖南六郡は大津県となり、翌年の明治５（1872）年には滋賀県と改称し、犬上県を統合して現在の滋賀県が生まれました。そして、明治 22（1889）年４月１日の町村制施行により、野洲郡には、現在の野洲市に含まれる７村〔野洲、三上、篠原、義王（祇王）、中里、兵主、中洲〕と他の６村〔守山村等〕が成立しました。その後、明治 44（1911）年に野洲村が町制施行し野洲町となり、昭和 17（1942）年には野洲町と三上村が合併（野洲町）しました。

昭和 28（1953）年の町村合併促進法の施行により、昭和 30 年代前半に全国的に市町村の合併が進められました。野洲郡では、昭和 30（1955）年、守山町、小津村、玉津村、河西村、速野村が合併し、新生守山町が発足し、北里村は近江八幡市に編入しました。野洲市域では、中里村と兵主村が合併、町制施行して中主町が発足、同時に野洲町、篠原村、祇王村が合併して新たに野洲町が発足しました。その後、昭和 32（1957）年に中洲村の吉川・喜合・菖蒲が中主町と合併しました。

平成 12（2000）年の合併特例法（市町村の合併の特例に関する法律）の改正を契機として全国的に市町村合併が進み、この流れを受けて平成 16（2004）年に野洲町と中主町が合併して現在の野洲市が誕生しました。

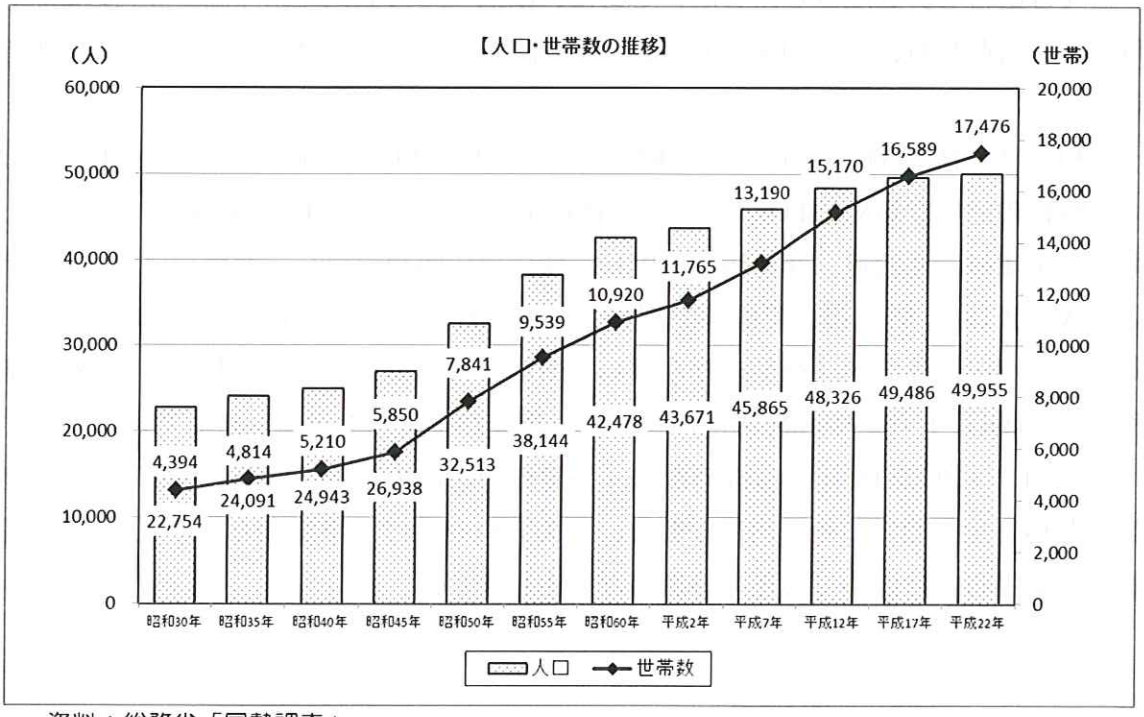
2．人口と産業

（1）人口

野洲市の人口は 49,955 人で、17,476 世帯（平成 22 年国勢調査）です。人口及び世帯数は、住宅地の開発が進められた昭和 40 年代後半から 50 年代にかけて急激に増加し、近年においても緩やかに増加傾向は続いています。鉄道の利便性の向上等により、大阪・京都・大津市等への通勤通学圏としての位置づけが強まったことが影響していると考えられます。また、世帯数の伸び率は人口の伸び率を上回り、１世帯当たりの人口は国勢調査では 2.86 人と、３人を下回っています。

年齢構成は、昭和 60（1985）年まではほとんど変化していませんでしたが、近年の年齢階層別人口の推移では、年少人口（0～14 歳）が減少（比率が 25.0%から 15.3%に）し、逆に老年人口（65 歳以上）が大幅に増加（比率が 9.2%から 20.1%に）するという傾向が見られ、全国的な傾向である少子高齢化の進行が本市においても明らかに見られます。この少子高齢化の状況は、平成 22（2010）年の年齢階級別人口比率でみると、県平均とほぼ同様の比率となっています。

本市は、主要企業の立地により守山市、近江八幡市、草津市等の近隣市町からの就業者が多い状況です。栗東市、草津市などに対しては流出が多くなっています。また、京都市へは 2,000 人以上が流出していますが、近年では、近隣市との結びつきが強まってきています。



資料：総務省「国勢調査」

（2）産業

野洲市域は、「近江米」の産地として古くから“豊積の里”と呼ばれ、稲作を中心とする農業を基幹産業としてきました。農業は、水稲を中心に小麦や大豆、きゅうり・だいこん等の野菜、メロン、ブドウ、春菊等の施設園芸のように、大都市近郊の特徴ある農業が行われています。昭和 40 年代以降ほ場整備が進められ、大半の農地が整備済みとなっている一方、農業従事者の高齢化や後継者不足等が深刻化するなど農業を取り巻く状況は厳しく、農家戸数、耕地面積も減少傾向が続いています。また、近年では、体験農園や農産物加工・販売所等の交流施設が整備されるなど、観光施設と連携した新たな展開が進められています。

市域の工業は、昭和 30 年代後半以降より、大都市近郊の立地特性や交通利便性、さらに積極的な企業誘致により、外国資本の企業をはじめとして、金属、化学工業、一般機械器具、電気機械器具等の多くの企業が立地し、近年では、情報通信機械、電子・デバイス等が中核となっています。本市には滋賀県認定産業団地である野洲工業団地（大篠原地先）、乙窪工業団地があり、平成 9(1997)年に完成しています。また、本市は工場立地促進などを目的とした「野洲市工業振興条例」を制定し、一定の条件を満たした工場立地に対し、用地取得助成、雇用促進助成、環境関連事業助成などの優遇策を行っています。

市域では、古くは旧中山道、旧朝鮮人街道沿いに商店が分布しており、特に永原地区では、中世以来「永原市」が開かれるなど、市域の商業の中心となっていました。現在では、大規模な商業施設の立地などが進み利便性が向上していますが、一方では地域の生活を支える商店の必要性も再認識されています。

本市の観光資源には、琵琶湖岸のマイアミ浜、あやめ浜や、三上山などの自然資源、兵主神社や御上神社に代表される歴史・文化資源、ちゅうずドリームファームのような体験型施設などがあります。しかし、年間の観光客数は近年減少傾向にあり、平成 22 年では約 130 万人となっています。また、観光客のほとんどが日帰り客であり、宿泊客の比率は低くなっています。県の観光入込客統計調査では、「滋賀県希望が丘文化公園」、「びわ湖鮎家の郷」が上位にあります。

3．都市の基盤状況

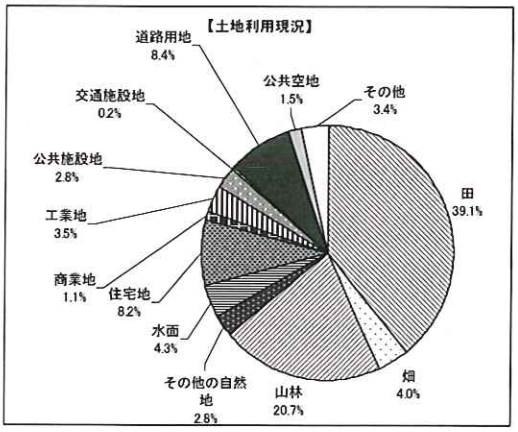
（1）土地利用状況

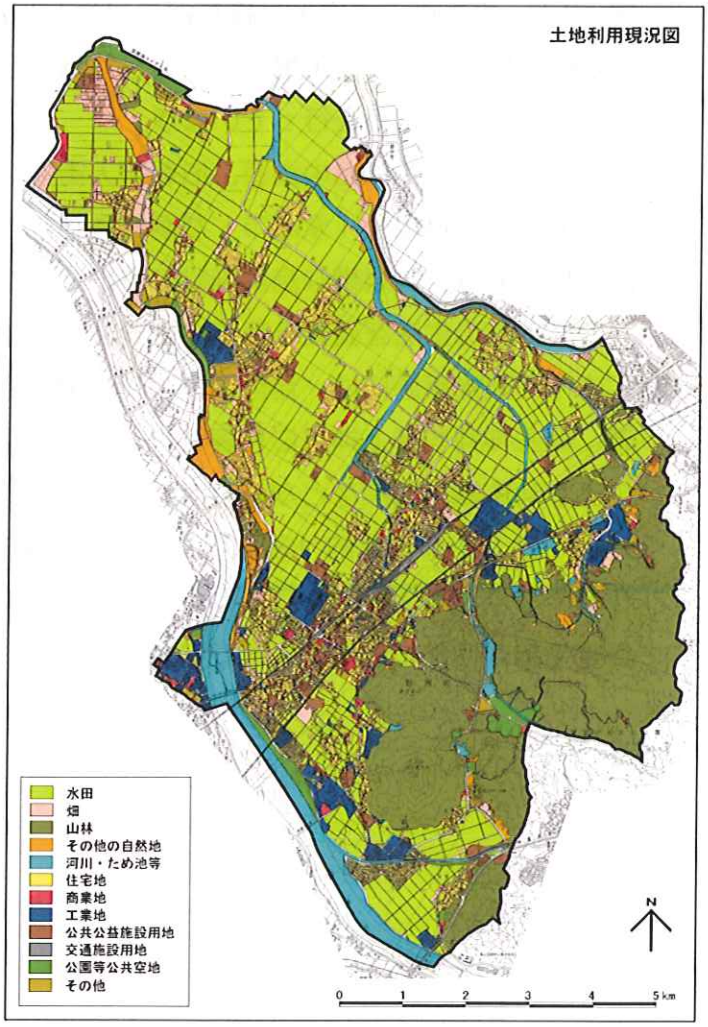
野洲市の土地利用をみると、琵琶湖水面を除く市域の約 43%が水田等の農地であり、山林、その他自然地を含めると約 67%を自然系の土地利用で占めています。一方、ＪＲ野洲駅を中心として、ＪＲ東海道本線、ＪＲ東海道新幹線と並行するかたちで商業･業務地、住宅地、工業地等の市街地が広がります。

市域の市街化は、昭和 40 年代から国鉄（現ＪＲ）野洲駅周辺に、新しい住宅地等の形成が始まり、主要な都市基盤の整備が急速に進んできました。特に野洲駅の北口開発事業街区の整備により、市域の中心核が形成されました。

昭和 45 年に野洲駅の北東側に電車基地が作られ、京阪神都市圏との時間距離が短縮され、利便性が高まったことにより、計画的な住宅地の開発が行われました。この時期に日本ＩＢＭ（昭和 46（1971）年完成）に代表される工場等の進出が始まり、次第に市街地が拡大していきました。

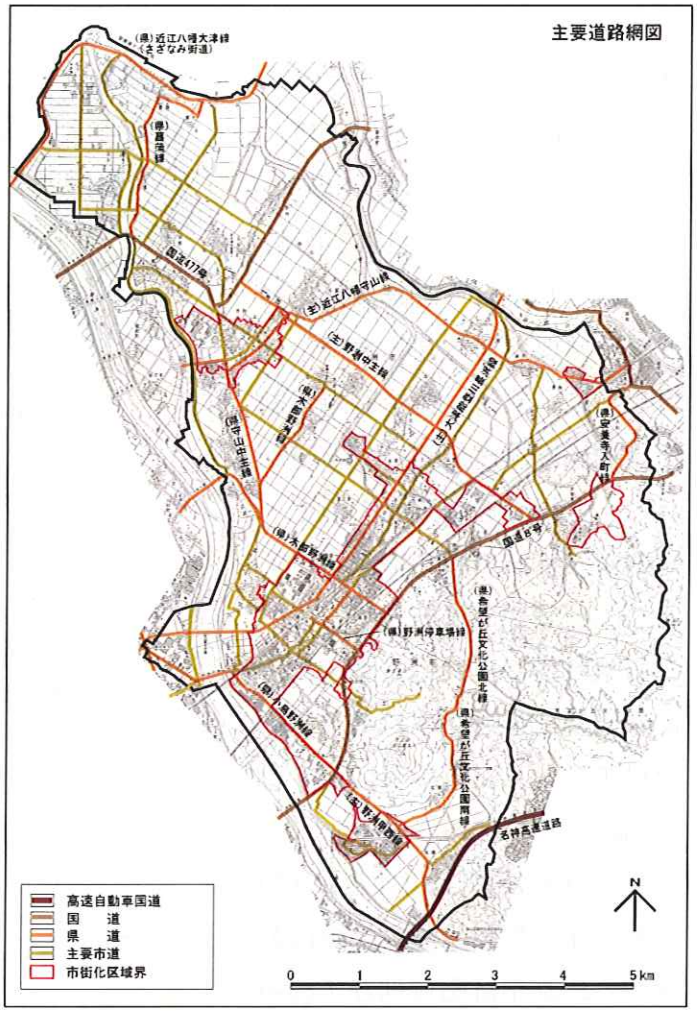
市街地の状況について、国勢調査の DID（人口集中地区）の変遷から整理すると、昭和 55（1980）年時点の 1.2k㎡から、平成２(1990)年に 2.2k㎡に拡大しており、この時期に市街地が急速に拡大したことがうかがえます。その後も DID 面積、人口は増加を続けています。



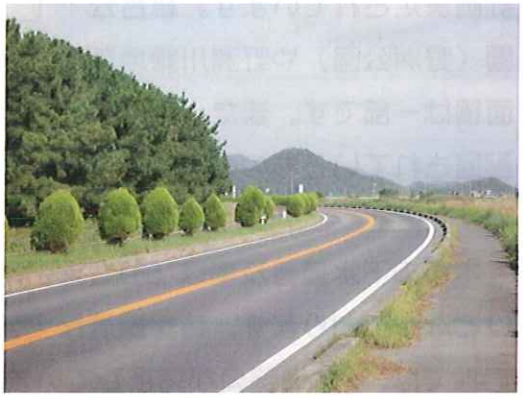


（2）交通

野洲市には、国道８号、国道477号をはじめ、主要地方道大津能登川長浜線、一般県道近江八幡大津線（さざなみ街道）等の幹線道路が通っており、湖東・湖北地域と湖南・大津市方面とを結んでいます。この他、野洲中主線、守山中主線、野洲甲西線等の県道及び主要市道により市内の道路交通網を形成しています。しかし、県道、市道の一部は狭幅員、未整備の部分があり、特に生活に密着した道路の整備が求められます。また、市域が河川にはさまれているため、河川横断箇所において朝夕に渋滞が発生しており、特に国道８号バイパス等の整備が課題となります。



平成22年道路交通センサスによる主要道路の交通量は、国道８号、主要地方道大津能登川長浜線、一般県道近江八幡大津線（さざなみ街道）等の４路線が１万台／12 時間を超えています。また、本市の自動車交通は国土連携軸に沿った方向が主流となっています。

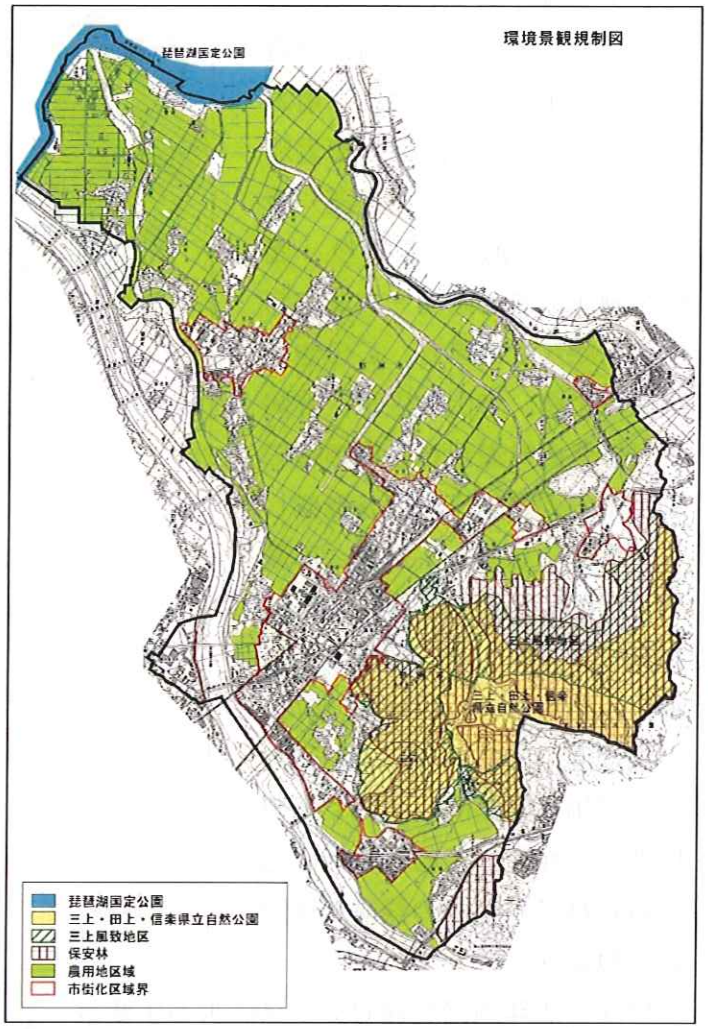

【主要地方道近江八幡大津線(さざなみ街道)】

ほぼ全ての路線で休日の交通量は平日よりも少なくなっていますが、近江八幡大津線（さざなみ街道）だけは休日の方が多くなっています。この路線は湖岸を通っており、沿道に各種観光、レジャー施設が立地していることが関係しているものと考えられます。本市の鉄道は、ＪＲ東海道本線（琵琶湖線）のＪＲ野洲駅及びＪＲ篠原駅があり、この両駅を中心にして近江鉄道株式会社及び滋賀交通株式会社の路線バスが市内を網羅しています。ＪＲ琵琶湖線は、京阪神都市圏と周辺地域との連絡強化を進めており、本市と京都、大阪との時間距離は近年縮まってきています。特にＪＲ野洲駅は新快速電車が停車するため、大阪への通勤圏に十分含まれるようになりました。

4．都市環境と景観

（１）都市の環境

野洲市は、２町合併により、琵琶湖から、これに注ぐ家棟川、そして希望が丘、三上山に至る、豊かな“水と緑”に囲まれた多様な自然環境を有する都市となりました。また、琵琶湖岸・湖面は琵琶湖国定公園に、希望が丘・三上山周辺は三上・田上・信楽県立自然公園に指定されており、ビワコマイアミランド、滋賀県希望が丘文化公園など、自然環境と身近にふれあえるレクリエーション施設等に恵まれています。

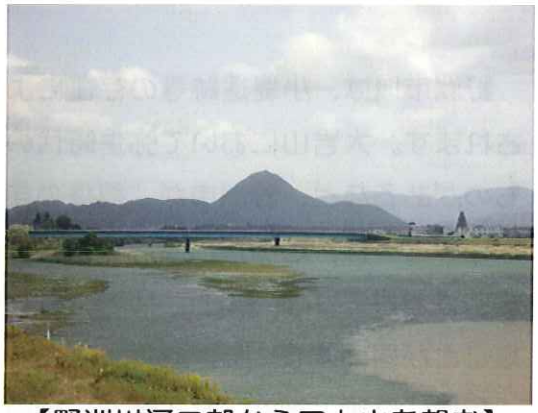


都市計画公園は、14箇所（総合公園１、近隣公園４、街区公園９）、都市計画緑地が７箇所計画決定されています。総合公園（野洲公園）や野洲川緑地など、面積規模の大きな公園が計画されていますが供用面積は一部です。また、地域住民に身近な公園については、街区公園や児童遊園等は配置されているものの、地区公園、近隣公園等の地域の中心となる公園は少ない状況です。

本市の下水道普及率は 99.3%に達しており、未整備は市街化区域の一部を残すだけとなっております。特定環境保全公共下水道事業や農業集落排水事業を実施した集落地では、下水道整備が完了しています。また、ＪＲ野洲駅周辺の市街地の一部では、大雨時に道路が冠水する地区があるため、適切な雨水排水対策が必要となっています。

既成市街地のほぼ中央を流れる祇王井川は、「平家物語」に登場する祇王にゆかりのある歴史的資源であるとともに、近年ではポケットパーク等の整備により周辺の都市環境に潤いを与える貴重な資源となっています。

（2）都市の景観



【野洲川河口部から三上山を望む】

野洲市域の南部に位置する三上山は、富士山に似た円錐型の山容から通称「近江富士」と呼ばれ、古くから湖南平野を歩く旅人や湖上を進む舟人の目印として、近江を代表する秀麗な眺望景観を形成しています。日本を代表する名勝・景勝として選定された近江八景のうち“瀬田の夕照”では、瀬田唐橋から遠景に三上山を望んでいます。また、国指定の名勝である琵琶湖対岸の居初氏庭園（天然図画亭庭園　大津市堅田町）は、三上山を借景に取り込んだ庭園です。このように、三上山は、わが国を代表する琵琶湖周辺の景観資源として、市域のみならず、滋賀県下の景観に重要な役割を担っています。そして、三上山から妙光寺山、鏡山等に連なる山地、丘陵地は、風致地区に指定されており、湖南平野や琵琶湖岸から眺望される美しい山並みの保全が図られています。この三上山を含め、旧野洲町において野洲八景が選定されています。野洲八景は、『三上山の秀麗』、『野洲川の清流』、『希望が丘の新緑』、『御池の静寂』、『野洲平野の眺望』、『弥生の森の秋色』、『向山の暮色』、『悠紀の里の薫風』が選定されています。

【悠紀の里の薫風】

【向山の暮色】

※野洲市観光物産協会

琵琶湖では、湖岸の景観、水面の景観、そして遠景にある山並みの三つが大切な景観の要素となっています。市域では、マイアミ浜、あやめ浜等の白砂青松の砂浜や、ここから沖島と雄大な比良山系を背景とする眺望が琵琶湖を取り巻く景観の構成要素となります。市域北部の琵琶湖岸と湖面は、「野洲市景観計画」に基づく琵琶湖景観形成地区及び琵琶湖景観形成特別地区に指定しています。また、「野洲市景観計画」では、主要地方道大津能登川長浜線等の沿道を「沿道景観形成地区」に、ＪＲ野洲駅南口周辺については、「野洲駅南地区」に指定しています。

5．都市の歴史と文化

野洲市域は、小堤遺跡等の存在により旧石器時代から人が暮らしていたことが確認されます。大岩山において弥生時代の銅鐸が数多く出土しており、中には日本最大のものがあるなど、野洲市が“銅鐸のまち”である貴重な歴史遺産です。古墳時代には大岩山古墳群、越前塚古墳を始めとする多くの古墳が築かれ、「古事記」や「日本書紀」における「安直（やすのあたい）」、「安国造（やすのくにのみやつこ）」の記述と併せ、この地域に有力な豪族がいたことが伺えます。

市域には御上神社、兵主神社、錦織寺など古い歴史を持つ神社・寺院が多くあり、建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡等国宝をはじめとする文化財が数多く残されています。また、境内にはまとまりのある緑地が存在し、市街地・集落地における地域環境・景観上重要な役割を担っています。特に、兵主神社には国の名勝に指定されている庭園があり、秋には紅葉が美しく、近年では庭園をライトアップして歴史的な空間を特徴づけています。

旧中山道や旧朝鮮人街道沿いは、近世以来のまち並みの面影を残している箇所もあり、野洲川から行畑・小篠原・三ツ坂・桜生・辻町にかけての沿道は、昔ながらの風情が残っています。そして、点在する道標や祠、碑なども観光資源となっています。

旧朝鮮人街道に近い永原の地は中世に勢力をもっていた永原氏の居城があり、その後、織田信長が近江進攻の際、家臣の佐久間信盛を配置し、自らも宿泊したことが記録されています。そして、徳川氏の時代に入ると、その北側に御茶屋御殿（永原御殿）が築かれ、徳川三代にわたり、上洛下向する際の宿泊・休息の場として利用されていました。なお、御殿の建物は芦浦観音寺に移築されたといわれています。

江戸時代の国文学者で松尾芭蕉の師匠として知られている北村季吟は、野洲市北の集落で生まれました。毎年、命日の6月15日（現在は第2土曜日）には、北村季吟顕彰俳句会が北村季吟句碑前で行われています。

【旧街道の名残】

【兵主神社の庭園】

【庭園のライトアップ】

6．都市計画の経緯

旧野洲町では昭和 35(1960)年 7 月 4 日に、旧中主町では昭和 36(1961)年 6 月 6 日に、全域（琵琶湖水面を除く）が旧都市計画法による都市計画区域に指定されました。また、都市計画道路出庭大篠原線、野洲川日野川線、野洲南桜線、小篠原三宅線、野洲停車場線、野洲中央線、市三宅妙光寺線、南桜永原線といった現在の主要な都市計画道路はこの時期に当初決定された路線です。

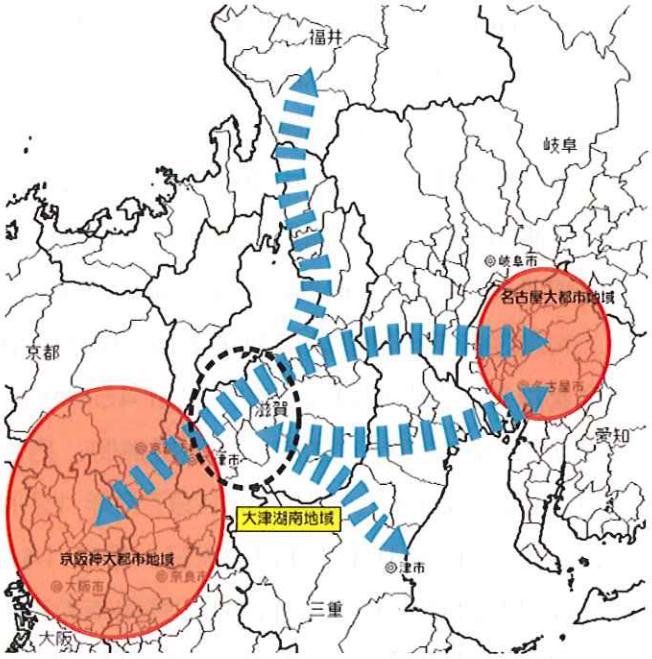
昭和 43(1968)年の新たな都市計画法の制定を受けて、昭和 45(1970)年4月 22 日、大津湖南都市計画区域が決定し、現在の市域全域（琵琶湖面積を除く 6,053ha）が含まれることとなりました。昭和 45(1970)年 7 月 15 日に市街化区域と市街化調整区域の区域区分が決定し、旧野洲町、旧中主町合わせて 594ha が市街化区域となりました。この後、昭和 52(1977)年 12 月 23 日、昭和 59(1984)年 12 月 28 日、平成 6(1994)年 10 月 21 日、平成 14(2002)年 4 月 30 日と、平成 24 年 3 月 28 日と、5 回の変更が行われ、野洲市の市街化区域は 767.2ha となっています。特に平成 6(1994)年の第 3 回変更では、大篠原地区の工業地（株式会社村田製作所）や乙窪地区工業団地、ホープタウン錦の里により大規模な拡大が行われています。

市街化区域には、平成 24 年 3 月現在で 11 種の用途地域が指定され、さらに風致地区（三上風致地区）や、主な都市計画道路、野洲公園（総合公園）をはじめとする公園・緑地など、本市の基本となる都市計画の大半が決定されています。

市域では、昭和 40 年代から住宅地の開発が進められましたが、昭和 53(1978)年には旧中主町吉地西河原地区において、土地区画整理事業の計画決定により住宅地の形成が進められました。また、近年では住宅地、JR 野洲駅周辺の中心商業地、再開発地区等において、地区計画制度を活用し、各地区の特性に応じて良好な市街地等の環境を誘導するきめ細かなまちづくりが行われています。

7．都市の広域的位置づけ

野洲市は、旧東海道に近接し、旧中山道沿いに位置していたことから、古くから交通の要衝であり、現在においても、名神高速道路（中央自動車道西宮線）、国道８号、ＪＲ東海道本線、ＪＲ東海道新幹線が横断する国土軸上に位置しています。また、近畿圏においては、京阪神都市圏近郊の大都市周辺地域に位置づけられています。



【野洲市を中心とする連携軸のイメージ】

本市を含む滋賀県は、近畿圏において戦略的な位置にあり、将来的にも広域幹線道路網の充実等により、京阪神地域はもとより、中部圏域、北陸圏域との連携強化が期待されます。

琵琶湖に関しては、水と緑の広域ネットワークプロジェクトとして、大阪湾や淀川流域とともに水環境の再生、水と緑のつながりの構築、人と自然との触れ合いの確保、水文化の継承等の主要プロジェクトが位置づけられています。